

## アドヴェントムジーク

「アドヴェント」（待降節）という言葉は大抵の日本人は知りませんが、キリストの生誕を待つ約4週間は、復活祭前の受難節と同様に、キリスト教国では非常に大切な期間とされています。クリスマス（12月25日）直前の日曜日が第4アドヴェントで、そこから溯って各日曜を第3、2、1と名づけるので、今年はクリスマス・イヴの24日が第4アドヴェントと重なり、12月3日が第1アドヴェントでした。

12月にヨーロッパを訪れたことのある方ならご存知でしょうが、アドヴェントの期間は大都市、小都市に限らず、夜の街は星やもみの木のモチーフを象った美しい照明で飾られ、また中心地では「クリスマス市」が開かれ、華やいています。日が短くて、寒くて、といったヨーロッパの晩秋の暗く陰鬱な気分を吹き飛ばすような、明るく楽しく希望にみちた雰囲気。それもそのはず、キリスト教の暦では、第一アドヴェントに新しい年が始まるので、12月はいわば新年なわけです。

ドイツではこの期間、大小あらゆる教会で、殆ど必ず「アドヴェントムジーク」という演奏会が開かれます。復活祭前の受難節にバッハのマタイ受難曲などが演奏される事は日本でもよく知られていますが、アドヴェントムジークの方はあまり知られていませんね。

教会は大都市でも小さな村でもいたる所にあり、どこでもこの4週間の間に大抵一度はアドヴェントムジークが演奏されるわけですから、アドヴェントムジークの演奏会の総数たるや、驚くべきものです。そして、演奏会は大抵日曜日の午後、と決まっております、待降節の間の日曜日は通常なら4回、今年のようにクリスマス・イヴと第4アドヴェントが重なれば実質的には3回しかないのですから、この3回の日曜日にはいたる所でアドヴェントムジークの洪水です。私は数年前より現在住んでいる村のカトリック教会でアドヴェントムジークを主催していますが、同じ村にはルッター派の教会もあり、また直ぐ近隣の町にも教会があり、なるべくよそと重ならないように、と日程を決めるのがまず大変です。重なると、聴衆の数に影響するのは勿論ですが、何より、演奏者が出演出来なくなる可能性が高いからです。というのも、そういう教会での演奏会に相応しいバロック音楽を演奏する団体などは引っぱりだこで、あっちでもこっちでも同じ人達が演奏するからです。それでは、それほどにポピュラーなアドヴェントムジークとはどんなもののでしょうか。バッハのクリスマス・オラトリオ、ヘンデルのメサイアなどがこのジャンルで有名なものですが、これらをまともに演奏するのは中小の教会ではなかなか難しい。まず、多くのプロ演奏家を必要とするから、お金がかかります。そんなお金は、小さな教会にはありません。お金がなくても、うまく演奏家を説得して無料で弾いてもらえればいいけれど、そんなに大勢の音楽家を説得するのは簡単ではありません。友人のライブチヒ放送交響楽団員は、うまく同僚をお願いして、ライブチヒのトーマス教会で演奏する前に「リハーサルのために」クリスマス・オラトリオを村の教会で演奏する事に成功しましたが、こういうのは例外です。しかし、そこまで有名な大曲でなくても、待降節にふさわしい曲はいくらでもあります。待降節のコラールを用いた曲やキリストの生誕をテーマにした歌曲、そして世俗曲であっても、例えば、日本で「きらきら星」として知られているメロディーはドイツでは「明日、サンタクロースがやってくる」ですので、モーツァルトの「きらきら星変奏曲」は待降節によく演奏されます。ちなみに、この曲の原題はフランス語で「ああ、私は貴方をママと呼ぶでしょう！」ですから、待降節向きとはいいい難いですが。また、「キリストのお誕生日を待ち望む期間」という性格上、子供が大切にされるのも待降節の特色で、子供の演奏も重宝され、大人の演

奏の合間にリコーダーや四分の一のヴァイオリンでクリスマス melodies を弾いてみせたりする。ともかく、そういうアドヴェントに関連した曲を集めて演奏し、最後に聴衆を含めて賛美歌を歌って終わる、というのが一番普通のスタイルのようで、前述のクリスマス・オラトリオのようにプロが主体になった芸術性の高い催しは全体からすれば少数派です。ですから、純粋に音楽を楽しむつもりで行けばがっかりすることもあるわけですが、日常生活に溶け込んだ伝統としての音楽を味わう事のできる最良の機会、と言えなくもない。アドヴェントムジークの時には、通常ガラガラの教会が普段なら音楽会などには行った事も無い人達でいっぱいです。斜陽化しているクラシック音楽界にあって、アドヴェントムジークだけは栄え続けている。これこそは、現在のドイツ一般大衆に真に愛されている、数少ないクラシック音楽の形態、と言えましょう。

誤解を避けるために付け加えれば、真に芸術性高いアドヴェントムジークも勿論存在します。ライプチヒの室内合唱団「ジョスカン・デス・プレ」のアドヴェント・コンサートなどはそれです。たまたま知り合いが中で歌っているので一度聴きにいったところ、心を洗われるような聖夜の雰囲気ですっかり感動し、以来、毎年聴きにいきます。これを聴かないでは一年が終わらない。巷にあふれている「大衆的な」アドヴェントムジークに飽き飽きしてきた頃、これを聴くとすっかり生き返った気分になり、ドイツにいてよかった、と思います。